

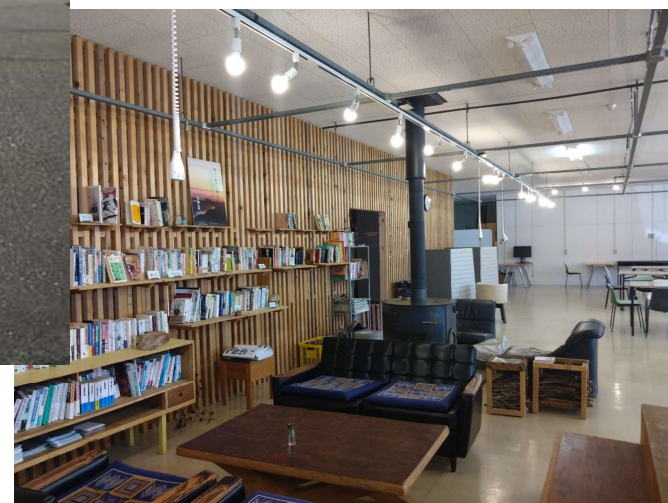
●第2日 徳島県神山町 認定NPO 法人グリーンバレー

「創造的過疎レクチャー『偶発性をデザインする～人口5000人の小さな町はなぜ進化し続けるのか～』」

目的 中山間地の神山町がなぜ**地方創生の聖地**と呼ばれるようになったのか。
まちづくりの先駆的な取り組みや考え方に学ぶ。

会場 神山バレーサテライトオフィスコンプレックス

担当者 作田祥介事務局長



●神山町の概要

○1955年に旧5村が合併。当時人口20,000人、現在4,817人。面積173.3 km²（森林面積率86%）。高齢化率50%超。

○小学校2校、中学校1校、県立高1校、保育所2か所。

※2022年、自然の中で子育てをしたいという移住者がオルタナティブスクール（認可外保育施設）を作った。

○2004年、四国で初めて全戸に光ファイバー網整備。

レクチャー中の大南理事長（左上）

2023年、「神山まるごと高専」（私立の高等専門学校）開校。

○役場職員数100名程度。

一番人口の多い神領地区

＝山あい集落が形成されている。

町の中心部を鮎喰川が流れ、地域住民に親しまれている。

◎特産品 すだち（生産量全国トップ）、椎茸、梅干し

◎見どころ 桜・・・地域住民が20年くらいかけて植樹。

県内外から観光客が押し寄せる。

雨乞の滝・・・日本の滝100選。

焼山寺・・・四国霊場12番札所。

近年は海外からもお遍路さんが来る。



◎かつて林業で栄えた町

製材所7つ、森林組合がある。

町として森林をどうしていくのか？→2019年、森林ビジョン策定。

- 出来る限り地域の杉を地域で消費してほしい
- 神山の杉で家を建ててもらおう
- どういう人に仕事を頼めばよいのかわからない→工務店や設計士の見える化
⇒キャンペーンのためのウェブサイト開設

地理的条件、自然環境、特産物など、日本の多くの田舎の状況と変わらない。

国際的な観光地・山・温泉・神社仏閣、大企業、工場もない。

あるのは全国どこにでもあるような自然。

なぜ神山町で 創造性に富む変化が連続的に起きるのか？

●認定NPO法人グリーンバレーとは

「日本の田舎をステキに変える！」をミッションに2004年設立。2017年認定NPO認証を受ける。

ビジョン：人をコンテンツにしたクリエイティブな田舎づくり
多様な人が知恵を融合するせかいのかみやまづくり
創造的過疎（※）による持続可能な地域づくり

※創造的過疎：人口減少の現状を受け入れ、人口の中身を変える。

若者や創造性ある人材の誘致によって人口構成の健全化を図るとともに多様な働き方が可能なビジネスの場としての価値を高めることにより一次産業のみに頼らない持続可能な地域を目指す。

過疎地共通の課題：仕事がない、若者が魅力を感じる仕事がない

→プロジェクト群を通して課題を解決したい、可能性を開いていこうと話合っている。

●神山が変化していくきっかけとなった4人

森さん ・ ・ キャンプ場経営

佐藤さん ・ ・ 金物店経営、商工会会長

大南さん ・ ・ 土建業

岩丸さん ・ ・ 呉服店経営

30年前、30代後半～40代前半でPTA役員や
商工会青年部だった時に活動を始め、現在に至る。



◎大南信也氏（認定NPO 法人グリーンバレー理事長）

○神山町生れ、神山町育ち。1977～79年アメリカのスタンフォード大学留学。

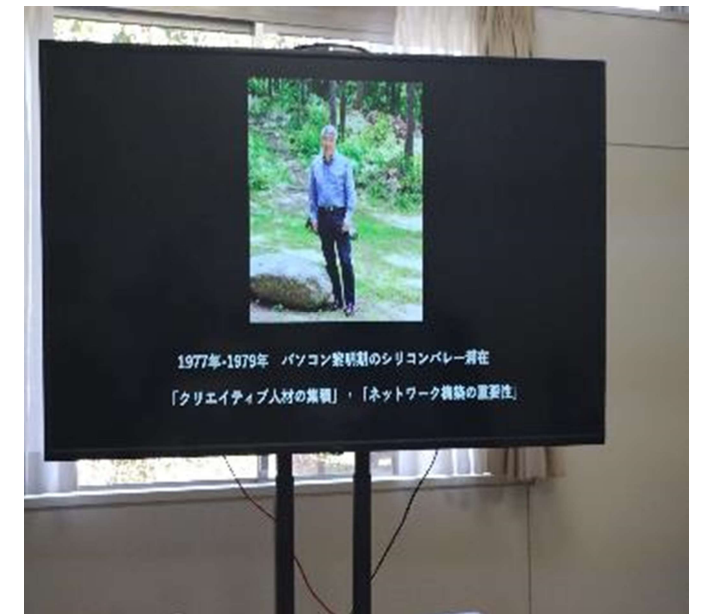
パソコン黎明期にシリコンバレー滞在。

この時考えたこと

- ・クリエイティブ人材が集まっている
- ・ネットワーク構築が大事

地元に帰ってきたとき考えたこと

- ・自分の役割は？
- ・神山のこどもたちに提供できるものは？
- ・海外に出て英語を学んできたのだから、町を世界に繋ぐことが自分の役割ではないか？

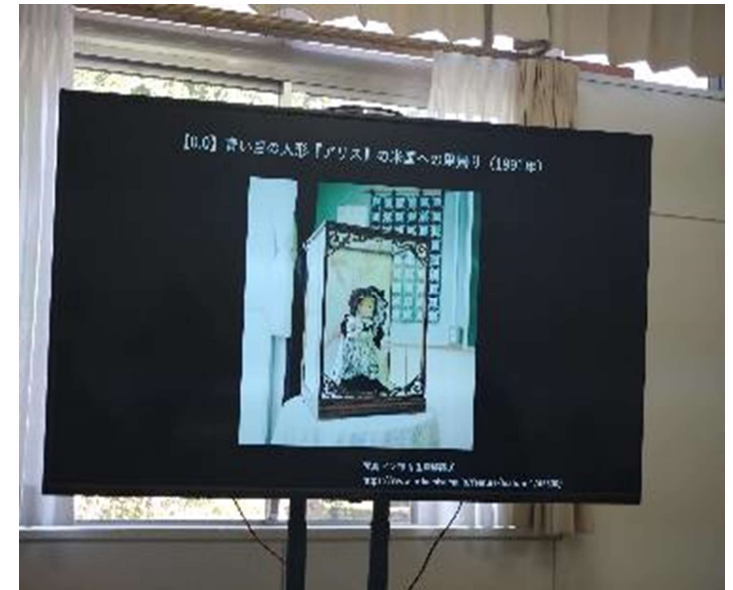


○1991年：アリスの里帰り運動

- 1927年、アメリカから友好親善を目的に12,739体の人形が日本の子ども達に贈られた。
- 第2次世界大戦が始まる
→ 敵国の人形だからと焼いたり壊したりするキャンペーンが起きた。
- 320体の人形が戦禍を生き延び、神領小学校に残っていた1体を大南氏が見つける。
- 人形についていたパスポートに、名前（アリス・ジョンストン）と出身地（ペンシルバニア州ウィルキンズバーグ）が記されていた。

贈り主探し→現地訪問

- ウィルキンズバーグ市長宛に贈り主探し依頼の手紙を送る。
⇒人形と同じ名前の贈り主が見つかるも既に亡くなっていた。
⇒せっかく贈り主が見つかったのだから、人形を里帰りさせようという運動が起きた。
⇒大南氏ら4人、地元の子ども達、教育委員会、役場の方等30名の訪問団を結成、ウィルキンズバーグに向かう。



現地で大歓待を受ける！



〈成功体験を得て神山に帰り〉

まちづくりにもっと関われないか？

4 人の仲間を中心に町を少しずつ変え始めていった。



○1992年 神山町国際交流協会設立

大南氏の活動・・・英会話教室を開く。

ウィルキンズバーグの子どもたちを神山でホームステイさせる。

○1997年 国際文化村委員会設立

当時、徳島県の新長期計画（10年計画）策定の動きがあった。この計画書の中に「神山を中心とした徳島国際文化村を作る」という計画があった。

・これを読んで彼ら（4人）が考えたこと

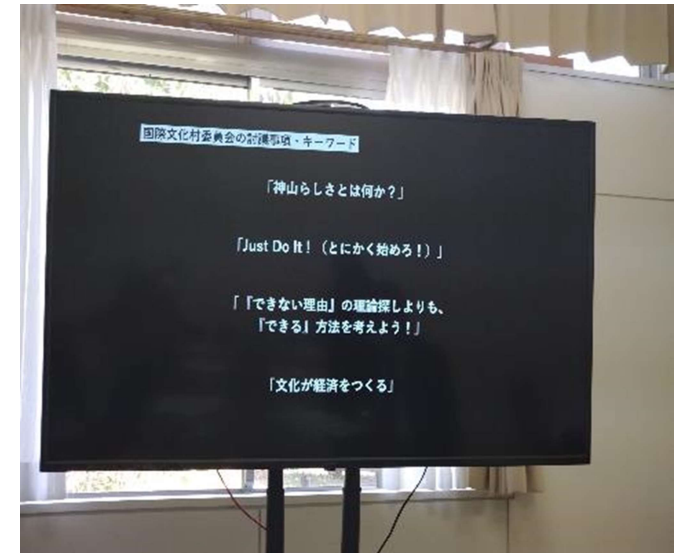
10～20年後、県、市町村が作った施設も地域住民自らが管理運営する時代が来るだろう。



ならば、住民目線で国際文化村に必要なものは何かを県に提案してみよう。
⇒1997年、国際文化村委員会設立。仲間達、役場職員と
25名ほどで会議体を作った。

〈当時の会議資料に残っているキーワード〉

- 神山らしさとは何か
- Just Do It (とにかく始めよう)
- 出来ない理由の理論探しよりも出来る方法を考えよう
- 文化は経済をつくる



〈当時の資料から⇒今の神山をつくった土台となる言葉〉

**「我が町をどうするか、という議論が十分に行われていないために、
町民が未来について漠然としか考えていない。**

自分たちが自らの文化を発見しそれを育てる努力をすべきであろう。

**また人口減少に対しては、出ていきたい人はそれだけのエネルギーを持ってるわけだから、その自主性は尊重されるべきである。出る者もあれば入ってくる者もある、
という柔軟な（おおらかな）考えを原点に出発するべきだ。**

さらに帰って来たり入ってくる者は必ず何かを運んでくるものである。

**そこでその人たちが持つ多様な価値観、自分たちとは違っていてもそれを容認し
受け入れる態度が必要である。」**

●徳島国際文化村プロジェクト

1. 環境面・・・1998年～ 道路清掃ボランティアプロジェクト。現在も2か月に1度実施。
2. 「神山アーティスト・イン・レジデンス 国際芸術家村」・・・国内外のアーティストが約2か月半町内に一時滞在し、創作やリサーチ活動を行なう。美術の専門家ではなく、住民自身がアーティストを選んでいるのが特徴。

「アーティスト・イン・レジデンス」を行う中で

移住、移住者が友人を神山に繋ぐ、移住者の起業、アーティストの支援という現象が起きた。

例えば)

- 中島恵樹⇒手嶋夫妻（歯医者さん）
 - ・・・山の中に歯科医院を作った。
- 子どもたちが親しめるようにブックカフェのようなしつらえで、県外からたくさん患者が来る。
⇒手嶋さんの友人が神山町に遊びに来て、
興味を持って移住。
- アーティストの移住、自腹による来町など。





この状況をもっと広く伝えたい！

⇒総務省「地域ICT 利活用事業」の助成金を活用し、アートを通じたまちづくりを伝えるために、トム・ヴィンセントというクリエイターの協力を得て、**ウェブサイト「イン神山」**制作。

オープンしてみると

⇒「神山に暮らす」コーナーに多くの来訪者。1ターン希望者の存在を知る。

移住者に来て欲しいが仕事がない。

ならば、〈仕事を持っている人、働く場所を自由に選べるような職種の人に働きながら一定期間地域に滞在してもらってはどうか？〉

⇒ **「ワーク・イン・レジデンス」** という考え方が生まれる。



地域が職種を逆指名する移住政策はできないか？



空き家になっている古民家情報を載せてみよう

パン屋さんを開業しませんか？

デザイナーさんいらっしゃいませんか？



町のデザインが可能になるのではないか？

移住・開業の実例

- 齊藤さん（移住者の手嶋恭子さんの友人）
 - • • 「土蔵造りの元造り酒屋」という記事を読んで築150年の古民家を購入。
フレンチビストロ開業。
宿泊業も営む。世界中の旅行者が集まる宿になっている。
コロナの影響でレストラン業はやめた。古民家購入と同時に、山も付いてきて、そこに自分たちでサウナを作った。



●サテライトオフィス誕生

きっかけは二人の建築家。

- 坂東幸助さん・・・徳島市出身。東京芸術大学で建築を学びハーバード大学に留学。卒業当時のリーマンショックで仕事がなく実家で過ごしていた時、「イン神山」を見つけ、古民家で月1万円で暮らせるという情報を見て神山町を訪ね、グリーンバレー（以下GV）と出会う。その時は移住には至らなかったが、その後東京芸大で教鞭をとるようになり、GVからプロジェクトの誘いがかかる。

当時のGVの状況

1軒の町屋改修の動きの一方で

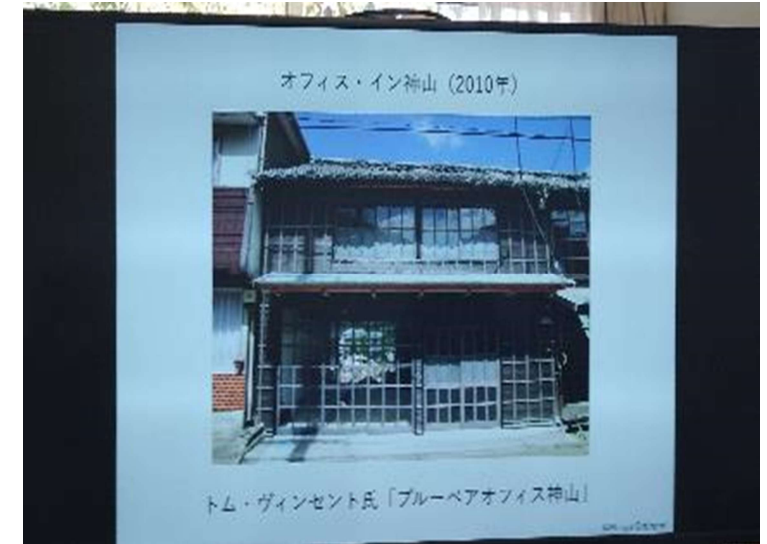
—アーティストの移住者が増え始めていたが—

アーティストはビジネスと距離が遠い、移住しても定住には結び付きづらい。

もう少しアートよりもビジネスに近いクリエイターの人たちを対象にして何か出来ないか？

例えば、グラフィックデザイナー、映像作家、カメラマン等がお試し滞在できる場所を作ろうと模索していた。

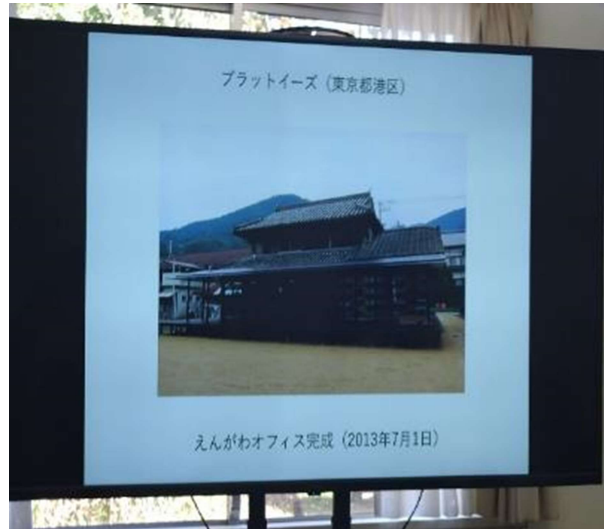
- 「イン神山」 作者のトム・ヴィンセント氏
 - • • 自分のオフィスを持ちたい。⇒坂東さんに声をかけ、東京芸大の学生たちの協力を得てリノベーション。
このオフィスづくりに坂東さんの友人の須磨さんも携わり、GVと出会う。



- サンサン（名刺管理のクラウドサービス）
創業者の寺田社長（須磨さんの高校同期生）
 - • • 自社の社員が自由な雰囲気生き生きとした働き方が出来ないか模索していた時に須磨さんから神山の話聞き、一緒に神山を訪ねる。20日も経たないうちにサンサンの社員3人が空き家だった建物で仕事を始める。これが神山における

サテライトオフィスのスタートされている。





大南氏はこの流れを「**サテライトオフィスが自生してきた**」と表現。

「アイデアから入ってない、神山に集まる建築家、クリエイター、デザイナー、あるいはITベンチャーの起業家の想いとか、アイデアとかを一緒になって実現していたら、結果的にサテライトオフィスが生えてきたことやと思います、自生してきた」

●行政も取り組みを加速
地方創生戦略策定始まる。

当時の神山町の状況・・・ITベンチャー企業が集まる町と報道されていたが、日本創生会議の消滅可能性都市全国ランキング20位という厳しいデータを突き付けられ、当時の町長や役場幹部陣は危機感を募らせた。

- ⇒このまま何もしなければどういう未来が待っているのか？まずは一番厳しいシナリオを考える。
- ⇒地域住民と役場職員とでワーキンググループを展開し、手立てを考える。



順位	自治体	順位	自治体	順位	自治体
1	青森県八戸市	11	山形県酒田市	21	新潟県上越市
2	青森県弘前市	12	山形県米沢市	22	新潟県長岡市
3	青森県五所市	13	山形県鶴岡市	23	新潟県三条市
4	青森県三好市	14	山形県尾花市	24	新潟県小千谷市
5	青森県南五所市	15	山形県川島町	25	新潟県津和野町
6	青森県北五所市	16	山形県川根町	26	新潟県津南町
7	青森県東津軽郡七戸十戸町	17	山形県川崎町	27	新潟県津島町
8	青森県東津軽郡野辺村	18	山形県川西町	28	新潟県津浦町
9	青森県東津軽郡大間町	19	山形県川前町	29	新潟県津路町
10	青森県東津軽郡大間町	20	山形県川崎町	30	新潟県津路町

- 「成り行き未来」
- ・城吾高校神山分校の廃校（2020年頃）
 - ・公共交通（池長～神山バス）の廃線
 - ・契約数不足によるケーブルテレビ事業の撤退
 - ・テラライトオフィスの撤退
 - ・人口減少と財政上の理由による、近隣市町村への合併
行政業務は船沖を中心に、新たな取り組みやハード整備はなし
 - ・病院や商店、タクシー会社の撤退
 - ・人口は2,400名（2040年頃）
 - ・最後の中学校と小学校の閉校（2040年頃）

そこで議論されたこと

移住やUターンや留まることを選択する背景には、地域に可能性が感じられる状況がある場合ではないか？

今、神山から人が減っていくのは町に可能性が感じられないからではないか？

可能性が感じられる状況をどうやって作るか？

【7つの条件】

- ①人がいる
- ②良い住居がある
- ③良い学校と教育がある
- ④生き生きと働ける
- ⑤富や資源が流出していない
- ⑥安全性がある
- ⑦関係が豊かで開かれている

素朴だが基本的な7つの条件が循環している状況が必要。

それぞれに施策療育を合わせ、具体的な創生戦略のプロジェクトが掲げられる。

主要なプロジェクト

■良い住居・・・子育て世帯向けの集合住宅を作るプロジェクト

8棟一家族世帯18世帯、単身者6人入居の共用施設がある集合住宅。

地域の大工さんが町産材で建築する。

熱源は木質バイオマスボイラー。

出来る限り地域の事業者が携われるように、分離発注方式で4年間かけて実施中。

■良い学校と教育・・・県立高の学科再編と県外生受け入れ

・旧造園土木科、旧生活科→環境デザインコース、食農プロデュースコースという現代的なカリキュラムにしていく。

・県外、町外の高校生のための町営寮を作り、そこで子どもたちが生活できる状況を作っている。

■地域の農業を次世代に繋いでいくフードハブプロジェクト

・地域の野菜を地域で消費できる場

・・・レストランとパン屋さんを作る。

・農業の担い手育成

・・・小中学校で食農教育の授業を行う。今年度からフードプロジェクトが小中学校の教育を手掛けている。

・ニューヨーク、カリフォルニア、オーストラリアなど

海外から料理人を呼ぶ

・・・海外の料理文化を学び、料理人も日本の料理文化を学ぶ。



■「神山まるごと高専」開校

コンセプト・・・「テクノロジー×デザインで人間の未来を変える学校」

開校までの歩み

2010年ごろーサンサンの寺田社長

・・・「創業10年で株式上場したい、その後は教育プロジェクトをしたい」

2016年ー「神山に学校を作れないだろうか」、「高専でいこう」

2019年ー神山まるごと高専設置構想発表。サンサン、東証マザーズ上場。



個人や企業からの寄付による高等教育機関、ふるさと納税を活用した初の学校。
寄付金を資産運用し運用益で運営する。学費、寮費は無料。寄付額110億円。

給食はフードハブプロジェクトが提供。日本一美味しい学校給食を目指す。地域の野菜をふんだんに使っている。

現在44名の学生が来ている。

5年後200名、教職員合わせて250名ほどが毎日学校給食を食べることになる。

→農家にとっても経済的好影響が及ぶ可能性。

開校後の展開

- ゴールデンウィークに、学生たちが地域の小学生向けにプチプログラマー体験イベントを開催。25名ほどが参加。
- 学生が町長に、将来町に欲しい店を提案する授業を行なった。

造的過疎のまちづくりの成果

- 社会動態は改善傾向にある・・・2019年度、20年度、22年度はプラス。
要因：町の取り組みや様々な施策の積み重ね。
- 若年女性の割合が50.3%に変わった。
- 高専の開校で、毎年40人の学生たちが来る。
異次元の地方創生になるのではないかと見られている。

神山は他の地域と何が違うのか

- レジデンス文化がある地域・・・アーティスト、クリエイター、 트레이ニー、料理人、スタートアップ、研究者、建築関係者、時に動物も。多彩なレジデンスが多様で創造的な人材を呼び、関係人口となって新たな展開や変化を生んでいる。

神山における地方創生とは

- 1999年に始めた文化芸術への取り組み・・・当時はあまり結果を見越していなかったのではないか。アートを通したまちづくりは正かが見えにくいだが、続けているうちに新しい人の流れが出てくる。

⇒料理屋、宿、食材などの需要が生まれ、サービス業や農業が活性化する。

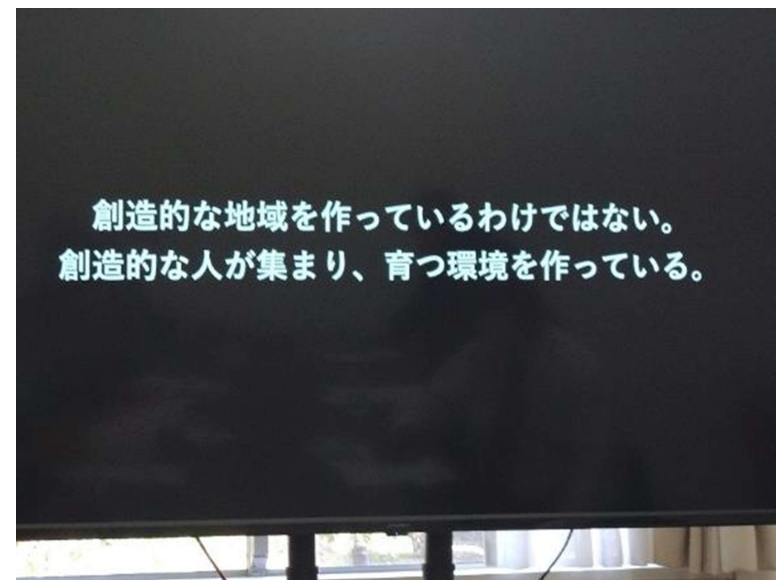
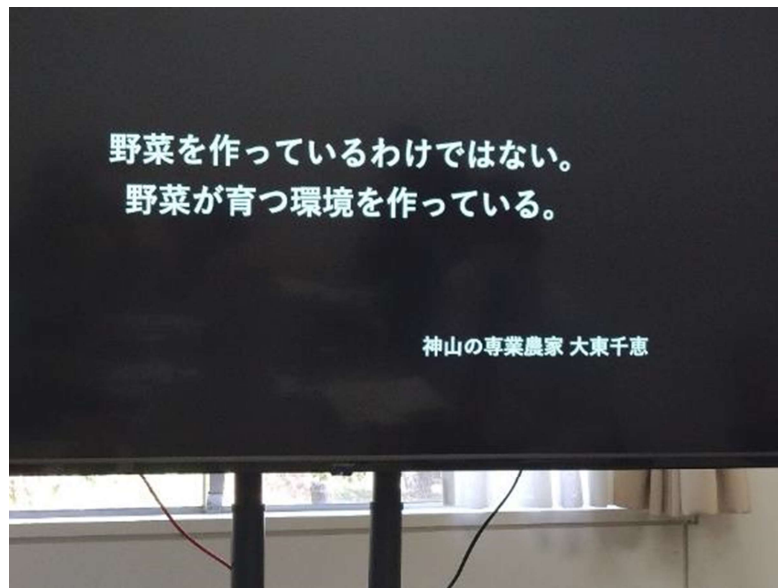
⇒現在は教育にも波及。

創造的人材が集まってサービス業、農林業が活性化、景観もきれいになるという好循環が生まれようとしている。

神山における地方創生とは、

働き方や働く場所の自由度を高め、地方に高度な職を呼び込むとともに
新たなサービスを生み出し、官公との連携によって地域外から適度な外貨を取り込み、
地域内経済の循環による自立的な発展をはかること。
こうしたことが1991年から始まって現在に至っている。

終わりに



所感

30 数年に及ぶまちづくりへの取り組みの端緒が、戦前にアメリカから友好親善を目的として贈られた青い目の人形の里帰り運動だったことにまず驚いた。大南さんの息子さんを通う神領小学校に、徳島県でたった一体生き延びたアリスという人形が残っていたことも不思議な縁である。

そこから訪問団を結成しアリスを里帰りさせたり、翌年には神山町国際交流協会を設立し、アリスの故郷の子ども達を招いてホームステイさせたり、アイデアと迅速な行動と展開力にただただ圧倒された。

1997 年に結成した国際文化村委員会がターニングポイントとなり、その後の活動が大きく発展していくことになるが、行政をリードしてきた取り組みには大いに瞠目すべきである。

我が町も人口減少の現状を受け入れ、創造的な人材を呼び込み、人口構成を変え、創造的変化を起こすべく発想を転換する必要があるのではないだろうか。